

廓の巻箋

三編

下

2942
9



久^クり^マと^マつ^ルを^トし^テ明^ア通^カく^ルも^モ字^ハ公^ノ傳^リ事^ハり^トも
バ^チ子^ハ代^ハり^マす^ルも^モさ^ラし^クも^モ一^ノ層^ノの^ノ苦^ク成^シ生^シ方^ハ一^ノ夜^ノ過^シ過^シの^ノ夜
也^ハせん^クと^モ凡^クも^モ後^ハを^モて^モ感^ズと^モ再^ハ後^ハより^モ人^ハ成^スん^ノ由^リ也
も^トバ^ハ案^トト^シ昔^ノ之^ノの^ノ位^方あり^ク。靈^ハ時^ハ取^リま^シつ^レけ^ルが
あ^ハま^シも^モ熱^ク騒^グし^テその^ノ明^ハの^ノ躬^ハ辰^ハ未^ハ打^テら^ル。石^ハ圓^ハ月^ハさ^シて^モ
疾^ク死^シ出^テ生^シま^シの^ノ子^ハ金^ハ無^クく^レ也^ト。か^ハ倉^ハと^モさ^ラん^ノ字^ハん^ノ
い^ハ帰^リま^シし^テ五^ノノ^ノ今^ハも^モそ^ト成^スま^シし^テ飛^ルる^ノ也^ト。彼^ハ
か^ハ環^ハさん^トと^モわ^シ送^リま^シう^レと^モ。あ^ハり^ヤか^ハ屋^ハ敷^ハへ^テ泊^リへ^ルま^シの^ノ也^ト。

け^サ今^ハ躬^ハ不^レ成^ルも^モあ^ハら^ウく^レ也^ト。何^ハ故^ハし^テこの^ノと^モ案^トま^シん
一^ノ私^ハも^モそ^トさ^ラん^ノ也^ト。あ^ハま^シの^ノ實^ハ則^ハの^ノ柏^ハ子^ハ成^シ打^テま^シて^モ
死^シて^モ飛^ルま^シし^テ。い^ハま^シる^ノも^モ麻^ハ入^テて^モ仕^マひ^シ今^ハ眼^ハが^モ見え^テ
く^レは^ラあ^ハま^シの^ノさ^シま^シた^レ勿^レ論^トを^モい^ハぬ^レ送^ルく^レん^ノ也^ト。
さ^ラし^テ。送^ルく^レは^ラあ^ハま^シの^ノ一^ノ泊^ハも^モあ^ハら^ウと^モい^ハふ^ノ也^ト。ま^シの^ノも^モさ^ラん^ノ也^ト。
明^ハも^モや^ハあ^ハま^シの^ノ傳^リ事^ハり^トも^モさ^ラし^クも^モ一^ノ夜^ノ過^シ過^シの^ノ夜
ころ^ハま^シせん^トそ^ノの^ノ何^ハも^モさ^ラん^ノ也^ト。あ^ハま^シの^ノ下^ハより^モ狂^ルる^ノ也^ト。
去^レ建^ル。千^ハ代^ハも^モさ^ラん^ノ也^ト。あ^ハま^シの^ノ傳^リ事^ハり^トも^モさ^ラし^クも^モ一^ノ夜^ノ過^シ過^シの^ノ夜

か内室さんといふ今娘はよお目よわりの事二階へ上り
とかをみるまゝにそとをみるまゝに六丁のあし千代去る審
振うりるをよもいふをたこれ別人あゝね母のか色ぐその打
由爽やうよ。髪の日之酒を居るづし。夫の字は信が徳子の帯
虎の案内ふよ代はあ。信をへむりて是やうよ。おふつひの
千代去るの志の志は愛へ行く所へよ。よよくか出るまゝに。
お爺さんよ。中様様やうよ。あまを思ふの一札にうひひ家
のあつとさうか色へつめとた。徳成をめて。アおあまも。

おを直子。さて早番使へらとお湯のすおあの方小泊して
飛多うと中々千代去胸小打さそ何の初遠ひのあり
あめいと満腹して速いよ。あもあは母の教成早く又の
やえ。一昨夜宅へ入帰りません。は方うへ送りをつけて
帰る帰へてをまゝに。今も今を案し。まをへ送りの人
がまゝに帰る。何様。さうりと移へつゆえ母も教を冷笑ひ
おへ何の事。その極小を解成せまどとも直へた。親小背をて
女見成る極く歩ゆてもあるが。お爺さん。がは作らう。



生さぬ中での十は年々交りあふけりて月とおまは方々
実の親子とてあつて居ても其方では他人不寄りて居
不法な積りあはるゝその積りて影もあつてお千代
中夜お湯を送らせその人成りて下せし何れも幾へ送
居けりて使ませりト急ぎ母の成りて汲みこつて
今頃とて字が降りぬ遣りてお千代と回春の事
て吐息吐きりて居れどもお色いよと成りて白服つて送
らせりとの人のいふに不性事由よと居りて居りて

南あはれ居りて小敷ひりて居りて 何れも何れも
と居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて
あはれ。虚言ありて居りて居りて居りて居りて居りて居りて
何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも
虚言ありて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて
よもあつて俯きりて物もいふて居りて居りて居りて居りて居りて
哽返りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて
身を居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて

九



二八



男
あまのけり
御奈公入所
女
嫁物屋

周を鳴
お氏女
の音也
舞の内

あつゝるその窓のまのこ突し人とも名え強どまの地
まの人も強ど女房もるた銀佐名もた怪うぬ所人
来しと少し拍うち強きて。体も若く有漏くさう成。
控るるのゆえに把り。今夜の生様ふ。噂りぬ親
親不病人があつて。強どと控くと利もあつと云ん
さつと一人の女まで。連と強て志すゆゑうゝ大弱りどと云
ゆ火鉢の側ふある。栗盆の中より栗破成歩一歩
か嬢さんおを成一ッ。宇八さんも予上人をせうせ今

夜におあつるのゆゑ強て世のあつるゆゑ。まん不自己が
老爺でも。か嬢さんと對せよ。先きぬも強うらうらう
今夜の方お。お年對せを強うらうらう。おはあつ
今夜お強て。内家さんがあつるとい生様ど多ト強成合
せう凶兇等。お強へ因未脱物子。氣もまき。栗盆う強成
あつて心強。姉が指揮で送らせ。さうは強うと云んぬ
今夜お強ゆもあつと云。其もあつあつもあつと云
おくれなへあつるの強へか一人も。強りてお強でもあつと云。

頼もしく泊りませう。戸を閉めておき、お酒を飲
へりやう。お個のけり相標し、お酒を飲むと把考せう。
お酒を飲まぬぐ飲けり。夜も交ぬる夜を夜居用い
お酒を飲まぬぐ夜具も痛むも清らつふ。お酒の味を
飲のううお酒不似合ぬ。お酒の味を飲のううの味を
ありとあつたお酒の味を。お酒の味を飲のううの味を
人よりあつたお酒の味を。お酒の味を飲のううの味を
お酒の味を飲のううの味を。お酒の味を飲のううの味を

頼もしく泊りませう。戸を閉めておき、お酒を飲
へりやう。お個のけり相標し、お酒を飲むと把考せう。
お酒を飲まぬぐ飲けり。夜も交ぬる夜を夜居用い
お酒を飲まぬぐ夜具も痛むも清らつふ。お酒の味を
飲のううお酒不似合ぬ。お酒の味を飲のううの味を
ありとあつたお酒の味を。お酒の味を飲のううの味を
人よりあつたお酒の味を。お酒の味を飲のううの味を
お酒の味を飲のううの味を。お酒の味を飲のううの味を

あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは

あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは
あまのこころをくみしめしむるは

郭の花笠三編巻之下終

